

## 要 旨

### 目的:

流産・死産に関わる看護職が抱く感情と、ケアにおけるストレス緩和に何が役立つのかを体系的に明らかにすること。

### 方法:

文献レビュー。検索エンジンとして医療中央雑誌 Web 版(Ver.5)、PubMed、CINAHL を使用し、国内外の日本語・英語文献の検索を行った。検索の範囲はデータベース登録開始年～2015年 11 月である。組み入れ基準は質的データを含む研究論文とした。Critical Appraisal Skills Programme (CASP) JAPAN による質的研究用チェックリストを用いて抽出された文献の吟味を行った。

### 結果:

国内文献 12 件、国外文献 7 件、計 19 文献をレビュー対象として抽出した。

流産・死産ケアの場面で看護職が抱く感情として、【悲しみ】【驚き】【恐怖】【怒り】【嫌悪】【苦悩】【無力感】【罪悪感】【戸惑い】【孤独感】【満足】の 11 のカテゴリーが抽出された。これらの中には、人間の原始的な感情である基本の 6 感情(悲しみ、驚き、恐怖、怒り、嫌悪、満足)の全てと、状況から発生する感情が含まれていた。

また、流産・死産のケアにおける看護職のストレス緩和に役立つものとして、【同僚からのケア】【対象からのケアの承認】【自己対処】【知識】【経験】【ケアに集中できる環境】の 6 のカテゴリーが抽出された。看護職は、<話を聴いてもらえる><辛い時間を共有してもらえる><気にかけてもらえる>という共感的な【同僚からのケア】を求め、これにより気持ちが楽になっていた。一方、<自分で気持ちを切り替える><区切りをつける><専門家のサポートを求める>などのセルフケアもまた、自分の感情への【自己対処】として行われていた。こうしたネガティブな感情への対処と並んで、<自分のケアへの肯定的な言葉や態度>といった【対象からのケアの承認】によりポジティブな感情を抱くことが、ケアにおけるストレスの緩和として看護職に経験されていた。そして、職場のサポートにより【ケアに集中できる環境】が提供されること、【知識】を獲得し【経験】を蓄積することが、ネガティブな感情への対処だけではなく、【対象からのケアの承認】を得るために必要とされていた。

### 結論:

流産・死産のケアを行う看護職に対して、看護職が安全に感情を表出することができる場の確保、看護職自身の自己の感情への対処能力の向上、看護職がケアに集中できるための職場環境の整備が必要である。これにより、ネガティブな感情への対処としてストレスが緩和されるだけでなく、ケアに集中し、両親との関係性を構築する中で、ポジティブな感情を得てストレスが緩和される可能性が見いだされた。

